

運賃一律100円の循環バス事業とイベントを連動させて実施

原町商工会議所

機関名	原町商工会議所			
所在地	福島県原町市橋本町 1 - 35			
電話番号	0 2 4 4 - 2 2 - 1 1 4 1			
地域概要	(1)管内人口	4万8千人	(2)管内商店街数	15商店街
事業の対象となる商店街の概要	(1)商店街数	12商店街	(2)会員数	339商店
	(3)空店舗率	13.8%	(4)大型店空き店舗数	0店
商店街の種類	1.超広域型商店街 2.広域型商店街 <u>3.地域型商店街</u> 4.近隣型商店街			

【事業名と実施年度】

平成14年度 活性化対策事業

総事業費

- ・ 運賃が一律100円の市街地循環バスを運行
- ・ 巡回バスを利用した買物客に対する無料乗車券発行や、巡回バス路線マップ・商店街紹介マップの発行など

23,026千円

【事業実施内容】

1. 背景

原町市の中心市街地では、近年の急速な車社会の進展や消費者の生活様式の多様化、公共施設の郊外移転など都市機能の郊外分散が振興したことから、空き店舗が増加している。更に大型店が中心市街地から撤退したことにより、既存商店集積の魅力は総体的に低下し、中心市街地全体の衰退・空洞化が深刻化しつつある。

このような状況下において、都市全体を支えてきた“都市の顔”としての中心市街地の再生を図るため、市内循環バスの導入により、人々を中心市街地へ吸引する手法の検討及び地域交通の構築を行うことを目的として、「原町市循環バス実験事業」を実施した。



循環バスの運行ルート

2. 事業内容

平成13年度に行なった原町市循環バス試験運行の2ヶ月間の実績を踏まえて利用者ニーズを検討し、平成14年度は子供や高齢者の利便性を高めるとともに、若年層の一層の利用を図ることとした。さらには市街地への来街者の増加と滞在時間の延長化を図ることにより中心商店街の活性化に寄与し、本運行の前段として、バス事業者の採算性や中心市街地の魅力度向上を検証することを目的として実施した。



循環バスの名称は「ハッピーバス」

(1) 循環バス運行事業内容

- 1) 循環バス名称：平成13年度原町市による循環バス試験運行に引き続き、市民に親しまれつつある「ハッピーバス」とした。
- 2) 運賃：集客力とバス利用度向上を最重要視し、「どこから乗っても、どこで降りてもワンコイン」とわかりやすいシステムを導入した。
 - ・大人100円とする（中学生以上）
 - ・小学生及び身体障害者手帳の交付を受けている者（小学生の身体障害者は除く）は大人の半額とする。
 - ・未就学児は無料とする。
 - ・既存路線における、定期券、回数券は利用できないものとする。
 - ・一日フリー券（200円）の発行。
- 3) バス運行地域：中心市街地2系統（バス停留所＝南北合計約53ヶ所）
 - 北周り（距離：約6.5km/周、所用時間28分）
 - 南周り（距離：約8.0km/周、所用時間30分）
- 4) バス運行時間：7時台から18時台まで（バス2台、運転手2名で運行） 1日12便運行
- 5) 事業実施期間：実施期間 平成14年4月1日から平成15年3月31日まで
 運行期間 平成14年7月1日から平成15年2月28日まで
 <第3日曜、年始1、2日を除く213日の運行>

(2) 循環バス内外装の装飾等の実施

- 1) 循環バスであることが一目でわかるようにコース毎に外装の色を分け、名称を表示した。
- 2) 国土交通省による8月の道路月間（8/1～8/31）にPRデザインの装飾を実施。
- 3) 原町商工会議所青年部が市内小学生からデザインを募集し、最優秀賞4名の作品を外装ラッピングに採用（10/14～12/31）。
- 4) 公共性と今後の事業展開を考慮し集客性向上のための外装ラッピング実施（1/3～2/28）。

(3) バス利用促進事業

1) 無料乗車券の発行

期 間：平成14年8月1日～平成15年2月28日

内 容：バスを利用して商店街で買い物をしたお客様に対し、帰りのバス無料乗車券を進呈。

原町商工会議所

2) イベント、パーク&ライド事業

期 日：平成14年7月27日（日）

内 容：グリーンパークとの北泉海浜公園シャトルバス運行
 (25回運行×平均乗車人数10名=250名の利用)

期 日：平成14年11月3日（日）

内 容：イベントの際は、駅通りが歩行者天国となり中心市街地への車の乗り入れが困難なため、原三小、原一小、サンライフ原町を駐車場として運行コースを一部変更し、交通緩和と誘客に努め無料運行を実施（207名の利用）。

3) バス路線と商店マップの発行と情報誌発行事業

期 間：事業期間中1回

事業内容：バス運行路線と中心市街地の個店のPRを掲載したマップの発行及び買い物トク得クーポン情報誌の発行

4) バス車内広告と情報発信事業

期 間：事業期間中

内 容：バス車内に商店会、個店と地域イベントなどの民間情報や相馬野馬追、相馬盆踊りをはじめとする原町市の代表的なイベントなど、随時情報を収集掲載し、購買意欲の向上と地域情報の発信拠点とした。

5) 定期フリーマーケットの開催事業

期 間：平成14年7月から11月の5回（第3土曜日）

内 容：毎月第3土曜日に開催し、旭公園内において商業者と市民が一緒になって「市」（フリーマーケット）を定例的に開催する。

- ・ 7/20（土） 10店舗参加
- ・ 8/17（土） 27店舗参加
- ・ 9/29（日） 41店舗参加
- ・ 10/19（土） 32店舗参加
- ・ 11/16（土） 27店舗参加

(4) 調査内容

- 1) 中心市街地通行量調査（平日・休日各4回）
- 2) 利用者アンケート調査（平成14年7月1日～12月31日）
- 3) バス利用者調査（平日・休日各8回）
- 4) 商店会アンケート調査（2回）

ハッピーバス利用者の状況

(単位：人)

	合計	南回りコース	北回りコース
利用者数	23,350	14,865	8,485
1日平均乗車数	110	70	40
1便当たりの乗車数	4.57	5.82	3.32

【効 果】

1. 循環バスの運行実績

平成14年7月1日から平成15年2月28日（1月1・2日は運休）までの期間において、南回りと北回り2コースにおいて、1日当たり12便、213日間で延べ5,112便の運行を行い、延べ23,350人が利用した。これは1日当たり110人、1便当たり4.57人に相当する。また、コース別内訳としては、南回りコースが14,865人（63.7%）、北回りコースが8,485人（36.3%）であり、1便当たりではそれぞれ5.82人、3.32人となった。

バス利用者の居住地については、アンケート回答者の9割方が「原町市内」という結果であることから、循環バスの利用者はほとんどが原町市民であるとみられ、利用目的としては「買物」（50%）、「通院」（39.7%）、「銀行や郵便局などの金融機関の利用」（26.4%）、「公共施設の利用」（20.1%）等が上位を占めた。また、利用した理由についても「料金が安い」（40.3%）と「バス停が自宅や目的地の近くにあるから」（32.4%）の2つが中心であり、「お店などの移動に便利だから」は1割未満（7.4%）となっている。



期間中、延べ23,350人の利用があった

2. 中心商店街活性化への効果

(1) 集客効果

「商店街経営者アンケート調査（第1回・第2回）」によると、「通行者・来街者の変化」、「来店客・売上等の変化」、「商店街のイベント・催しへの影響」については「変わらない」が9割方を占め、「かなり増えた・少し増えた」は件数にして6～9件（6～7%）にとどまっている。

(2) 自店の来客数・客層等の変化

1) 来客数について

「変わらない」が9割と大半を占める。これに対して、「少し増えた」は6%台の比率にとどまり、「かなり増えた」は皆無であった。「少し増えた」とするところは、栄町、旭町、駅前商店街を中心に2～3件程度となっている。

2) 自店の客層について

「変わらない」が9割弱を占めるが、第2回の調査では変化がみられたとする割合が全体で12.7%ほどあり、具体的には栄町商店街で「高齢者が増えた」とする回答が多かった。

3) 自店の商圈変化について

変化がみられたところは5%程度で、「新しい客が増えた」、「昔のなじみ客が戻ってきた」、「いつもの客の来店数が増えた」がそれぞれ僅かずつとなっている。「新しい客が増えた」は栄町、「昔のなじみ客が戻ってきた」という回答は、ふれあい商店街などでみられる。

原町商工会議所

循環バスの運行に伴い、自店の売上に変化がみられたかどうかについては、「少し増加した」が6%ほどで、「変わらない」が6～7割となっている。

(3) 商店街のイベント・催しへの影響

循環バスの運行によって、商店街のイベントや催しにおける客動員数に変化がみられたかについては、「変わらない」が6～7割を占め、「いつもより少し増えた」が1割台、「いつもよりかなり増えた」は僅かとなっている。その他としては、循環バスの運行に際して行われたイベントサービスシステム等の中で、好評だったものとしては、「帰りの無料バス乗車券」が全体の1/4の割合で最も多く、次いで「定期フリーマーケットの開催」、「買物ラリー・フリーパス券」の順である。

(4) 歩行者通行量の変化（平成9年と平成14年の比較）

1) 平日

駅前から四つ葉方面、逆の四つ葉から駅前方面の流れとも通行量は大きく減少している。この理由の最も大きい要因としては、駅前通りにあったサティ（平成14年5月閉店）や中堅スーパー（平成14年10月閉店）の閉店が相継いだことが指摘され、循環バスによる効果はいわばかき消されたかたちになったものと推定される。通行量の流れとしては、どの地点でも四つ葉から駅前方面の通行量が多くなっている。

2) 休日

駅前地点を除いて、各地点とも通行量は増加傾向を示している。特に、駅前から四つ葉方面への流れは、旭町、栄町、四つ葉地点が循環バス運行後、増加に転じている。四つ葉から駅前方面への流れは、旭町と栄町地点で増加している。また、いずれの地点もこの方面の通行量が反対方面を上回っている。

(5) 無料バス券・買物ラリー・フリー券等の効果

無料バス乗車券等の効果は経営者アンケートに基づく、「大いに効果があった・少しは効果があった」（22.8%）が「効果はなかった」（30.4%）を下回り、消極的な評価が多数を占めるが、無料バス乗車券発行における店の負担分については、「負担が大きい」とするのは僅かであり、「負担とは感じない」ないし「負担は小さい」を合わせた割合は約4割で、「どちらともいえない」とほぼ同じ割合となっている。

【課題・反省点】

(1) 循環バス運行における課題

商店経営者からみて、循環バスの運行が中心市街地の活性化に貢献できるかどうかについては、「大いに期待できる・少しは期待できる」が4割前後で、「余り期待できない・全く期待できない」の3割前後を上回っている。“期待が持てる”とする回答は、特に本町、栄町を中心に各商店街にわたり広く見られ、所属商店街や自店への貢献としては、「大いに期待できる・少しは期待できる」が3割弱で、「あまり期待できない・全く期待できない」の4割程度を下回っており、商店街への貢献より厳しい見方をしていることがわかる。

バス運行の継続については、バス利用者の場合は「必要だと思う」が9割を超えるのに対して、経営者では「ぜひ継続すべきだ・できるなら継続すべきだ」が過半数、「どちらでもよい」が3割などと、両者での認識にはやや相違がみられる。

(2) 循環バス運行内容における改善点

運行ルートについて「満足・おおむね満足」が第1回調査では「不満」の割合をやや上回っていたのが、第2回では逆に大きく下回る結果となっている。また、利用者アンケートの意見欄や事務局に寄せられる電話などでも、運行ルートの問題、要請が多くみられるなど、課題が浮き彫りになっている。

バス停についての場所については「どちらともいえない」が4割を占めるものの、「満足・おおむね満足」も4割を超え、「不満」を大きく上回っている。特に、「不満」とする件数はわずかであり大きな問題はなかった。運行本数についても、バス停とほぼ同様であり、特に、「不満」は1件のみであった。また、バス利用者アンケートでは、「このままでよい」が8割方を占め、「増やした方がよい」が17%となっている。運行時間帯については、「どちらともいえない」が半数弱であるが、一方、「不満」は1件のみ、満足・おおむね満足」は全体の約1/3となっている。

バス利用者アンケートでは、「このままでよい」が全体の8割方を占め、満足度は高い。また、「始発・終発便」の変更を求める意見が、それぞれ十数件寄せられている。バス料金については、「ちょうどよい」が全体の7割を占め、「安い」が3割弱となっており、合わせるとほぼ100%に近くなる。なお、「高い」はわずか1.7%であり、料金については全く問題ないといえる。

(3) 事業の評価

1) 中心市街地活性化としての側面

1日当たり平均約110人の利用者があり、また、利用者の過半数はバス利用の目的が「買物」というアンケート結果であったものの、中心商店街経営者は、ほんの一部の店舗を除いて「来街者並びに来店者数にはほとんど変化はみられなかった」と回答している。このことから、今回の循環バス実験事業の最大目標であった「中心市街地活性化」への効果という点では、期待するような結果は生まれなかったということがいえよう。

その大きな要因のひとつには、近年の駅前をはじめとする中心市街地の空洞化が進み、それに追い討ちをかけるように駅前通りから大型店（サティ）や地元スーパーの撤退が相継いで起こるなど中心市街地での顧客吸引力がさらに縮小する中での実験事業となったため、本来プラスに左右すべき効果が、かき消されたかたちになってしまった点が指摘できる。

しかし、こうした状況下にもかかわらず、循環バス運行期間中の、駅前通りの休日における歩行者通行量が若干なりとも増加を示したことは、今回の循環バスの運行実験とそれに連携して行われたイベントや催しの事業の相乗効果として評価でき、集客施策と交通の便（足の確保）の対策等が連携して講じられれば、一定の効果につながることも裏付けられたといえる。

中心市街地の活性化という観点からは、循環バスだけで人の流れを変えることには限界があることが今回の事業で改めて明らかにされたことから、今後は、駅前地区の整備や中心商店街の振興策等と連動し、一体となって相乗効果を高めるバス運行システムのあり方が問われるだろう。

2) 交通弱者（交通制約者）の救済面としての側面

中心市街地活性化を目的としてのルート設定から駅東のルートがなくなり、特に市立病

院行きがない点であり、そのことが平成13年度と比べて高齢者と小学生の利用割合の減少となって現れたといえる。

利用者数の多い少ないは別として、利用者は高齢者をはじめ、学生、主婦といった交通弱者が中心であり、従って、これら交通弱者への救済としての側面では昨年同様高い評価を得るとともに、こうしたお年寄りをはじめ、お年寄りや小中学生のいる家庭、車を運転できない主婦や妊婦の方々といった交通制約者からの、バス運行継続に対する切実な願いの声はますます高まってきていることが実感される。

3) バス運行事業としての効率的側面

利用者数（1日当たり約110人、1便当たり4.57人）は、バス運行事業の採算ライン（一応の目安と考えられる7人～10人／便）からみて厳しい数値結果であることは否めない。今回のバス運行ルートや目的地、時間帯等に対する問題点や要望が数多く寄せられていることから、「利用者がいない」のではなく、今回設定されたルートや目的地、運行システムの内容が、利用者が求めているものに十分応えきれていないことも浮き彫りにされたといえる。

交通弱者を中心とした利用者のニーズを十分に把握したうえで、駅や商店街、病院、学校、公共施設などと、中心部や郊外の住宅地を結びつけた目的志向型の運行ルートの設定や小型車輛によるきめ細やかなルートの設定等の改善により、増加する高齢者をはじめとする潜在的需要の掘起こしはまだまだ十分に可能であると考えられる。

【教 訓】

(1) 高齢社会と移動（住民の足）の確保

車社会のまちなりきっている地方都市ほど、高齢者をはじめ、車に頼れない人たちにとって不便な時代が来ようとしている。したがって、数値が悪いからやめるということではなく、むしろ、そのような現状にある地方都市ほど、住民の足としてのバス運行をどう実現していくかがますます重要になってきているといえるだろう。

高齢者が多くなるにつれ、移動（住民の足）の問題は地域社会の大きな課題となっている。それは、本人にとっても、高齢者を抱える家族にとっても大きな課題となる中で、暮らしやすく、住みやすいまちであるためには、安全で便利な、人と環境にやさしい移動手段が確保され、住民が生活を送る上での移動の権利が保証されることが必要といえる。

平成13年度の試験運行と今回の実験運行を通して、貴重な実験結果、データ等が得られたことから、これらの成果を十分に活かしながら、原町市の地域特性と利用者（交通制約者等）の潜在ニーズ（本当に助かると思えるような）に即した事業性の高いバスの運行ルート、運行システムを育てあげる努力を継続していく必要があると考えられる。

(2) まちづくり・商店街づくりと連動した「新たな生活バスの運行」

中心市街地は商業機能だけでなく、市民生活の拠点として捉え直すとともにその活性化を図るためには、バス運行の単独事業だけではなく、駅前整備や商店街の魅力アップなど中心市街地の抱える問題への対策と連動し、一体となった取り組みが必要である。

また、21世紀は都市型観光の時代ともいわれ、地元の住民も、他所からの観光客も個性ある街並みや歴史・文化を求めてまちに繰り出し、まちを巡り歩き、ウィンドーショッピング

や住民とのふれあい、暮らしの風景との出会いを楽しむといった時代がまもなく訪れようとしている。

そのような時代に向けてまちが発展していくためには、歩いて楽しい・歩きやすい、ウィンドーショッピングや文化活動、祭りなどの多彩な行事が楽しめるそうした環境のまちづくりと同時に、住民や観光客を乗せて市内を巡り、豊かな生活と賑わいのある中心市街地形成を支える新たな交通手段としての足の確保が重要になってくる。

そのためにも、これまでの中心市街地活性化バスや福祉バス、通学・通勤バスの範疇にとられることなく、現在の路線バスとの重複を見直しながら、市民をはじめ、行政、商店街、関係団体等の協力のもとに、まちの特性と住民生活に即した「新しい生活バス」の運行に向けて、今後とも取り組んでいく必要があると考えられる。

【関連URL】

原町商工会議所 <http://www.haracci.com/>

原町の循環バス利用

213日で23350人

5割が「買物目的」

原町市街地で昨年七月から二月末まで実験運行された循環バスの実施結果がまとまった。運行した二百十三日間の利用者総数は三万三千三百五十五人で、一日当たり約百十人。利用目的の五割が買物で、ほとんどの人が循環バスの必要性を認めた。二十六日の実験事業実行委員会に報告する。

循環バスは南回りと北へ百七十六人回答) によ

回りの二コースで走ると、利用目的の50%が買物で、通院、金融機関の利用などが続いた。高客数が増え、外出行客が増えたとする人は「変わらない」が多かった。こうした状況もあってか、循環バスの継続を求め、関係機関で具

1日当たり110人

用者との間でギャップがあった。

市民の足の確保策を探る

実験踏まえ市

循環バス実験事業は十三年度に市主体で実施され、今年度は原町商工会議所が中心となって取り組んだ。市は二年間の実験事業の結果を踏まえ、新年度に市民の足の確保策を探る。

バスなどの運行をめぐっては免許制から許可制に変わるなど規制緩和が進んでいるため、運行の経路や時間、タクシーの借り上げ配置の可能性などについて関係機関で具

「ハッピーバス」の利用状況を伝える新聞記事
(平成14年3月21日 福島民報より)